

一九五五年 火野葦平の北京視察

——その認識と見解——

増 田 周 子

はじめに

火野葦平は、一九五五年四月六日から十日にかけて、インドのデリーで開催された「アジア諸国会議」に日本の文化問題代表として参加した。「アジア諸国会議」終了後、会議に参加した日本代表団の一部の二十八名は、一九四九年十月一日に成立した中華人民共和国、すなわち新中国を視察することになる。火野も二十八名の一人として新中国の視察に参加した。火野らはカルカッタ、ラングーン、バンコク経由で香港に入り一九五五年四月二十日に汽車で深圳から新中国に入国した。そして、二十一日より広東から新中国を視察していく。火野の新中国訪問については、拙稿「一九五五年 火野葦平『アジア諸国会議』参加後—インドから香港、広東へ—」¹、「火野葦平の新中国視察記—広東から、漢口へ」²、「一九五五年火野葦平の新中国視察記 漢口から武昌、武漢へ」³で、四月二十六日までの視察の様相を記した。

本稿では、これまで記した新中国訪問記の続きのうち、四月二十八日以降に訪れた北京視察について、特に五月三日までを中心に詳しく報告する。論証にあたり、火野の撮影した写真や、見聞記、日記などを用いる。日記について

は、論者がすでに、翻刻し、明らかにした『中国旅日記』⁴を使用する。『中国旅日記』とは、横9.5cm、縦13.5cmで「MEMORANDUM」と書かれた手帳であり、全一六八頁である。一九五五年四月二十一日から五月四日までの新中国の訪問中の出来事を詳細に綴った日記風の「メモ」であり、当時の記録として貴重なものである。

さて、新中国の視察をルポルタージュ風に描いた作品『赤い国の旅人』⁵にも、火野らしき人物が「私」として登場する。もちろん、『赤い国の旅人』は登場人物が偽名ででてきたりするので、完全な事実ばかりではない部分もあるが、この作品のもとになった『中国旅日記』と照合すると、かなり事実に近い部分が多い。そこで、『赤い国の旅人』や当時火野が発信した記事なども考察に使用する。なお、本稿で使用する写真は全て、火野葦平が持っていたもので、火野家に所蔵されているものである。火野や、一行の撮影したものと考えられる。

一、北京到着 四月二十八日

火野葦平ら一行は、四月二十八日四時二十一分に、北京駅に急行列車で到着した。そこに、歌舞伎役者の三代目中村翫右衛門⁶が出迎えに来ていた。火野にとって北京は三度目だった。一度目は、一九四一年十月、妹の夫が華北鉄道に勤めていたため、二度目は一九四四年十月、南京で開かれた第三回大東亜文学者大会に出席した帰途に立ち寄った。いずれも戦前である。火野は、三度目の今回の北京訪問で次のように記している。

今度の旅の中心課題は北京にある。前二度のときのようなのんきな気持の旅ではなかった。私の反省や、覚悟や、思想問題や、私の気持を息苦しくさせている緊張感や、常久さんからの宣告——私が人間として、作家として、日本人としておしまいになるかならぬかという重大問題も、北京に来てはじめて解答が得られるというも

のである。⁷⁾

戦争に従軍した経験を持つ彼は、かなりの覚悟をして北京を訪れたのである。数台のハイヤーに同乗して城内に入った。火野の目に留まったのは「『解放台湾』は国をあげてのスローガン」だが、「『解放香港』の声はその片鱗も見られない」ことであつた。火野は「政治や外交の複雑さ奇怪さは私などにわかるはずはないとしても、一種の困惑に似た戸まどいを感じないでは居られなかつた」と記している。火野らは新僑飯店に宿泊した。このホテルには「美国的侵略武装力量必須従台湾撤出去」（『中国旅日記』）のスローガンが掲げられていた。一九五五年、台湾独立を中国は認めず、台湾を取り戻そうとしていたのである。

さて、北京のホテルに着いてからすぐに気が付いたことは、「あれほど名物であつた蠅の姿を、どこに行つてもほとんど見かけなかつた」ことである。火野は、町がきれいになつたからすぐに良くなつたとは考えず「そういうことにも革命というものの恐ろしさがあらわれているわけであろう。瞠目に値することといわなければならなかつた」と記している。さらに、翫右衛門さんと北京の街を歩きながら次のように述べる。

夜早く寝るようになったのは解放後のことらしい。新中国からは夜の生活というものがなくなつた模様である。（中略）これは広東でも漢口でもそうだったが、大きな料理屋、料理店やキャバレー、ダンス・ホールなどはすっかりなくなつてゐる。¹²⁾

新中国になつてから、全体統制が強くなり、歓楽街がなくなりつつあつた。翫右衛門さんが宿泊していたのは北京

飯店の三階であった。火野も以前北京を訪れた時には、北京飯店に宿泊していた。

昔はこの街でもホテルはパンパンの巢であったから、この北京飯店でもボーイが女をとりもち泊らせていた。(中略) 朝になると方々の部屋から、美しい旗袍姿の女が出て行くのを毎朝見た。(中略) 或る知名の士が、自分に病気をうつした女をふたたび呼び、泥酔してさんざんに打擲した事件があつて、当時もの笑いになったことがある。(中略) しかし、そんなちっぽけな復讐ではなくて、いま巨大な形で日本と日本人全体が復讐されているといつてよい。「北京飯店」はその象徴のように私には思われた。¹³⁾

一九三七年十二月十四日、北京に中華民国臨時政府(以下、臨時政府)が成立し、同政府が日本占領下にあつた華北を統治していた。一九四〇年に汪兆銘政権に吸収合併されたが、華北政務委員会へと改編され終戦まで統治を続けた。¹⁴⁾ 火野は、この時期のことを恨んだ北京の日本への思いを感じ取っていたのである。火野が到着した時の北京は、メーデーの少し前であった。

二、北京滞在 四月二十九日

火野ら、日本訪問団は、午前九時から新僑飯店の二階の部屋で全体会議を行った。そこで話し合ったことが『中国旅日記』に以下のように記されている。

○9時、全体会議。①ホンコンビザ件。②市内見物、工作員が案内するので、四五人、組になること、車を出し

てくれる。③日程、はじめ二週間といふことであつたので、すこし延ばしてもらふやう頼むこと。早くかへりたい人（中村氏は十一日に東京に着きたい、永瀬さんもいつしよ）朝鮮に廻りたい人、その他いろいろ。畑中さんから報告、朝鮮から招待されてゐるのは、帆足計、来馬卓造、木下順二、火野、畑中と名を発表する。議長泊尾君、テキパキ処理するが、例によつてゴジヤゴジヤ。

○ ソヴェート行の件。424号で協議。鈴木、近藤、松本、家永。話してゐると、中国側の人、打合に来てゐるといふことで、二階の広間に行く。流暢な日本語通訳さん。（10時20分）平和委員会事務局長（『中国旅日記』）この会議で話し合われたことは、火野によると、希望者は十人ほどいたが、朝鮮に六人が招待されたとのことであつた。その招待された中に火野もいたのである。¹⁵火野は次のように述べる。

私は、もしどうしても六人以上はダメというのなら、自分が棄権しようと思つた。日本の占領地であつた中国に来てさえ、これだけつらい思いをしているのだから、嘗ては日本の領土であり植民地であつた朝鮮に行くことに氣おくれが生じたのである。拷問は中国だけでたくさんだと思つた。¹⁶

火野は、かなり、戦争中の思いを背負い、苦しみながら中国訪問を続けていた。戦争に参加したことから、自責の念にさいなまれ、自ら戦争加担者であるという思いを拭い去ることはできなかつたのである。この北京では、「これまで案内してくれた戚慕光さん以下六人の工作員のほかに、さらに十人近くの案内者がつけられるとのことで」（『赤い国の旅人』）あつた。特にこの中で、火野は唐明処さんという案内人が印象的だつたようである。唐さんは次のよ

うに述べた。

「どうぞ自分の家にいるようなつもりで、なんでも自由に申し出て下さい。できるだけ、許される範囲の御希望に添い、お世話申しあげたいと存じます。見物したいところ、話を聞きたいこと、調べたいこと、会いたい人、なんでも遠慮なく。そして、意見を聞かせて下さい。われわれの新中国はまだ発足したばかり、欠点がたくさんあります。美点をほめていただくのも結構ですが、欠点を指摘していただくことをいっそう歓迎いたします。
(後略)¹⁷⁾

火野は、会いたい人として、「郭沫若先生、老舎先生、丁玲先生、と三人の名前を書いた。しかし、内心では先方の都合がわるくて会えない方がよいような気持だった¹⁸⁾。それは次のような理由からだ¹⁹⁾。

左翼文学に対しては私もひとつの批判を持って居り、その左翼文学の本山の作家に会うことには躊躇を感じる。(中略) 共産主義文学の講義をきいてもなおつまらない。それでも私が漠然と会いたいと思つたのは、ただ、思想や政治をはなれた文学者としての共感に立つ或るなつかしさと、中国の古典や伝統がどういう形で解放後の文学のなかでとりあつかわれているか、うけつがれているかを直接作家たちの口から聞いてみたいと思つたからであつた。それに、現在の中国文壇の状況、作家生活、胡風批判問題等についても知りたい気持があつた¹⁹⁾。

中国の案内人も実に謙虚で、忌憚ない意見を、日本人一行から受けようとしていた。一方で火野は、ずっと中国に

対して負い目を感じていた。「私が「日本鬼子兵」の一人であり、「麦と兵隊」以下の戦争作品の筆者であり、(中略)戦犯であつて、中国人の敵と目される人物の一人であるという、ひそかな自覚がぬけなかつた」⁽²⁰⁾からだつた。

また、火野は、この日くらいから、毛沢東の批判をひそかに始めている。毛沢東が珍重していた斎白石の絵ばかりが、北京のどこにでもあるのを見て、「中国現在の最高画家のようにとりあつかわれているのはすこし腑に落ちなかつた(中略)解放後、貧乏している斎白石に同情して、毛沢東が、白石の絵はなかなかいいじゃないかとかなんとかいつて褒めたのが、白石流行の原因だと誰かにきいたことがある。なにかで読んだのかも知れない。毛主席は日本の天皇陛下などよりはるかに偉大で、絶対的存在であるから、そんなこともあるかもしれない」⁽²¹⁾。毛沢東が天皇より偉大だと述べながら、絶対的存在という言葉に皮肉を込めている。この日は、午後三時から市内見物を行った。『中国旅日記』に、東安市場、天安門、北京大学を見学した後次のようにメモしている。

○チェコスロバキア展覧会

○宰城門―前の門はとざし、西方にひろい道路

○左に白塔

○西単城

○「前方は宣武門とおつしやいます。」王君

○西単、電車、商店街

○大道、西長安街、今年はるから左側に電車

○国務院、新華門、右側総工会

○天安門メーデー広場―紫禁城。

○北京飯店、左半分、タテマシ

○リンジイ便所の列。

○市民の群―紺の流れ。

(『中国旅日記』)

これらの箇所を回った後、新華書店にも行った。

本屋に出入りしているのはほとんど若い読者ばかり(中略)書棚全体に、共産主義、社会主義、唯物弁証法、唯物史観、革命、解放、等の文字が氾濫していて、赤い国の文化の全貌がわかるようである。文芸書の売場に行つて、十冊ほど買う。⁽²²⁾

また、国際書院でも「どこの国の本でもあるが、これも赤一色」「日本之部というのを見ても、日本で出版された左翼書ばかり」であった。火野は、次の如く記す。

なんの夾雑物も入っていない頭脳に、いきなり赤色教育をほどこすのであるから、その染めあがりは鮮やかなものにはがいない。選択の自由などははじめからないのである。(中略)赤い英雄の伝記ばかりだ。熱心にそういう書物に読みふけている可愛い少年少女たちを見て、私はなんとなく肌さむい感じをおぼえた。教育の大切さと恐ろしさについて考えさせられた。⁽²³⁾



チェコスロバキア歌舞団

読書の選択の余地もなく、青少年を共産党思想に染め上げていく様子を見て、徐々に新中国共産党の絶対思想に、火野は懐疑的な感情を抱いていくのである。この日の夜、火野らは、天橋劇場で、チェコスロバキア国家歌舞団の公演を見物した。

やがてベルが鳴り、チェコスロバキアの舞踊がはじまった。絢爛たる衣裳と、明朗で健康なダンス。野放図なまでに明るくのびのびした民族舞踊と歌。(中略) 観衆は拍手とアンコールで熱狂し、舞台もこれにこたえて、交歓風景はこころよいものであった。²⁴

としながらも、火野は、この熱狂の中で、「私は手をたたく気にならぬばかりか、この赤いどよめきのなかで奇妙な昏迷にとらわれていた」(『赤い国の旅人』)とも述べている。さらに、「旅のあとをふりかえって」で次のように記している。



天橋劇場 チェコスロバキア国家歌舞団

滞在中ほとんど毎晩のように、芝居や映画を見た。(中略) 全体を通じていえることはきまりきった筋と紋きり型の単調さである。無論立派な舞台があり、美しく面白く、感銘深いものはそれぞれあったが、あまりにも根本テーマが一本調子であることへの不満は抜けきれなかった。つまり芝居も映画も例の毛沢東の『文芸講和』の線に添うものでなければならぬので、ともすると、勸善懲惡の教訓劇めいてくる。でなければ、戦意昂揚劇のにおいがする。²⁶⁾

このように、毛沢東の思想にあつた芸術しか上演できないことに懐疑的な感情を抱いていた。そして火野は、この日「赤い国が実際によくなくなっていることを疑うことができなないし、赤い国にみなぎっている勝利のどよめきの声を否定することはできない。ただ、なぜよくなったか、そのよくなっている背後のものについて、まだ全的に肯定できにくいので、もうすこし北京で勉強したい」と記し、慎重に北京視察を進めていく覚悟を改めてするのである。

三、北京視察 四月三十日

四月三十日、火野は、「新中国は私の眼に、迷いのない明快な国と化したように映っている。しかし、そのかがやかしい断定の背後に、はたしてもはやなんの迷いもないであろうか」と考え始める。疑念の思いを抱きながら、四月三十日は、九時半から万寿山に行った。

万寿山とは、中国の首都北京西郊の頤和園内の名勝である。

○満寿山。頤和宮の仁寿門（漢語）

銅狻猊（面白い銅獸）仁寿殿。

○最近ぬりかはたものらしい。

○ゼイタク。ゴーカーのあと。（タダマイルを見て出す。女の地位。）

○塗りかへ中、職工宿舎がある。

○スホウの花。一つだけ笑つてゐる牡丹

○閲覧帖—無人管理。「人民文学」その他雑誌。

○諧趣園。○松、杉、なにかわからぬ白い花。

○涵遠靈 西太后魚釣りした池。

（『中国旅日記』）

と火野は、『日記』に書いている。さらに「最近塗りかえたらしく、門も建物も塔も色彩がけばけばしい。私はこれ

で三度目だが、万寿山は昔のまま、ほとんど変わっていないところはなかった。絢爛豪華の一語に尽きる⁽²⁸⁾と述べる。景福閣、仏香閣、拜雲殿等を経て、昆明湖のほとりに行き、三隻の屋形船に分乗した。中国民族学院の学生が十人ほど来ていた。「舟が湖心に出きると、(中略)不気味なほど静か⁽²⁹⁾」であった。

○湖辺に出る。長い回廊。

○聴鵬館—ここは西太后の乗つたといふ車があつたと思ふがない。舞台になつてゐるといふ。ときどきなにかやるのであらう。

○昼食。サボテンの花。外国人客、別のテーブルで葡萄酒を飲んでゐる。

○石船—西康省、の娘たち、少数民族、(民族学院生徒) チベット。

○船で、昆明湖に出る。三艘。ミカン。楊柳の並木。西湖を模して作つたといふが、たしかに西湖を思ひ出す。するやかな水棹の音。しづかな湖面。のどか。鳥の声。美しい萬寿山。太平の逸民みたい。

○頤和園の周囲16華里(2華里—8/キロ)湖のヒロサ22044公畝(中国一畝—日本6畝)

○泳いでゐる者。浮かんでゐる船。

○かすむ玉泉山の塔。大塔と、右に小塔。

○音もなくすすむ船。なんの音もなくなる瞬間。

(『中国旅日記』)

静かな美しい風景の中で「うっとりとなるような舟遊び。あたたかい陽がさしこみ、気持ちがいので何人もが居眠りをしてゐる。(中略)私はこの平和が奇妙で仕方がなかつた⁽³⁰⁾」。そして火野は次のように考えた。

インドのアジア諸国会議に行つて、原水爆戦争絶対反対をわめき散らし、赤い中国に來ると、革命と解放の血の闘争、アメリカ帝国主義に抗して、朝鮮の独立を助け、台湾を解放せよという金切り呀。しかし、この万寿山の昆明湖のうえは、眠いほど静かで平和だ。世界中の人間が全部こんな風にのどかに舟遊びをなぜ楽しまないか。³¹⁾

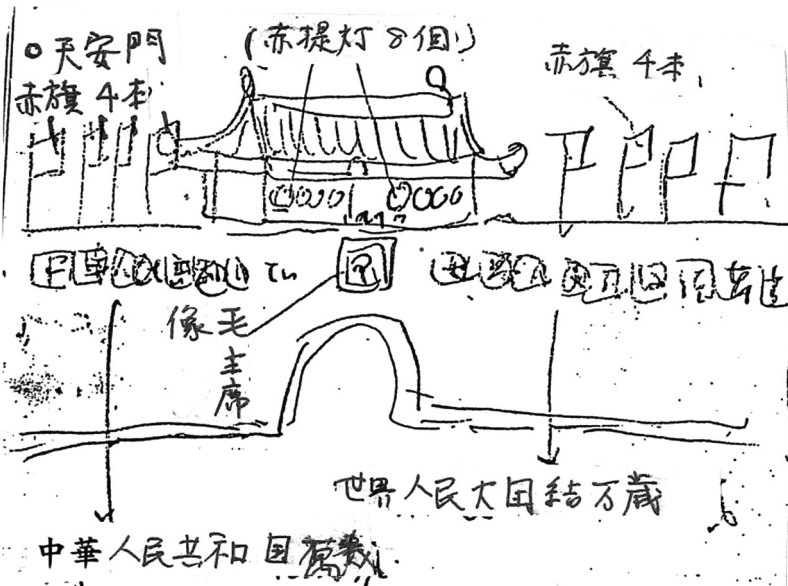
「アジア諸国会議」では、核戦争反対を訴え、平和を切望しながら、自国では血の闘争。こうした新中国の矛盾を火野は批判し続けていく。午後六時半からの宴会を終え、いったんホテルに帰り、天安門の周辺を歩いた。『中国旅日記』に次のようにある。

○いったん新橋ホテルにかへつてから、吉田君と二人、夜の街に出る。三輪車、天安門まで三十銭。イルミネーションで美しい建物。天安門の城壁に「中国人民共和国万歳」右に「世界人民大団結万歳」の電気文字。写真にとる。十時二十分、イルミネーションや電気文字が消えてしまつた。歩哨の兵隊がやつて來たが、なんともいはずなかつた。この門前の道は前の二倍以上になつてゐる。市中の道路がどこも広く立派になつたのにはおどろく。並木の下に黙々とゐる物売り。明日はこの広場はたいへんであらう。また、三輪車でかへる。二人で一円やつたら好々とニコニコ顔をした。(『中国旅日記』)

「軒下の橋梁や鴨居の豪華絢爛たる模様と色彩とが、キラキラとかがやき、夜だけにいつそう莊重の気が天安門にはみなぎっていた」³²⁾。なぜか、火野は毛沢東のあらわれる位置に、「石川五右衛門を思ひだした」³³⁾。毛沢東という新中国のトップに、火野は、日本の大泥棒、極悪人を重ねるのである。そしてこの日は終わった。



夜の天安門



火野葦平直筆画（『中国旅日記』）

四、慶祝五一 五月一日

この日は、火野ら一行は、慶祝五一労働節の式典を見に行く。『中国旅日記』にこの日の朝のことが書かれてあった。

○どんよりと曇つた空。シャワーをかぶる。すぐ朝食にと中原君いつて来る。チョッキを一度は着たが、暑いのでぬいだ。朝食の卓に宮崎龍介氏が来てゐる。白蓮さんも年とつたが、この人も老人になつた。労働者の招待状。胸につける観札證の赤い記章。各国の人たちも出発のため階下に揃つてゐる。インドで逢つたインド代表。

○九時前、バスで出発。表門から入れないといふことで、グルツと市中を廻る。街の人たち、子供にいたるまで、ニコヤカに手をふる。北海公園の中を通る。池の橋をわたる。左手に、白塔。ラマ塔。紫金城内に入ると、バス、自動車一杯。降りて歩く。幹は太いが低い杉の木。ベンガラ色の高い壁。美しい屋根瓦。各国の人たちがぞくぞく行く。ビルマの人（頭にフロシキ、尖つてゐるのは中に竹カゴ）

（『中国旅日記』）

歌人の柳原白蓮の夫、宮崎龍介氏も、その父が宮崎滔天で、孫逸仙と親しく中国革命に奔走していたために特別に招待されていた。式は十時からだった。

○東二台に上がる。燕しきりとび、笛のやうに鳴く。笛の音しきり。整理の巡査。美しい旗の列。若葉。

○中央白衣の一団。軍楽隊。五百人位。



火野葦平直筆画（『中国旅日記』）



慶祝五一

○前門。と天安門の中間に建設中の高い塔——趙さんが人民英雄塔といつてゐる。昔の革命から抗日戦争を含めてといふ。

○天安門

（『中国旅日記』）

燕がしきりに飛び、五百人近い軍楽隊がいて、若葉香る爽やかな中、人民英雄塔という「革命時代から、抗日戦争をもふくめて、解放戦争、朝鮮戦争までの無名戦士をたたえるもの」⁽³⁴⁾が建っていた。

いよいよ天安門上に、実際の毛沢東が登場した。火野が実際に毛沢東を見た印象は、次のようだった。

毛主席は想像していたよりもよく肥った、大柄な身体のようにだった。肖像画に見る温和な色男ではなく、頑丈に頬や顎の張った精悍な面魂のように思われた。どっしりとした巖のような感じである。⁽³⁵⁾

火野の『中国旅日記』には、「○10 m、毛主席、天安門上へ。大拍手。要人たちも居ならぶ門は20 mの高さ。」とある。中国市民は人民服を着て集まり、誰が誰かわからないほど同じようだった。「検閲台上に居ならんだ人物は全部で二十名、中央に毛沢東主席、その左右に、(中略)朱德副主席と劉少奇委員長、その他に、陳雲、彭德懷、林伯渠、李濟深、傅作義、彭真、鄧小平、張治中などがいた」³⁶。周恩来はバンドン会議の帰途で、郭沫若もインドの帰途で姿がなかった。続いて、

広場をどよめかす拍手と歓呼がおこった。毛主席は右手をあげてこれにこたえる。その手が八ツ手のようにひろく大きく見えた。口をとじたまま、かすかに微笑をたたえ、真正面に陽ざしをうけて、こころもち眼を細めているようである。³⁷

さらに、『中国旅日記』には、

- 挨拶、彭真市長。アイサツ・市長
- 東方紅の曲。ゆるやかで荘重なしらべ。みんな脱帽して、しいんとなる。
- 国歌。すごい対砲、歌の間中、百門、28響、鳴りひびく。
- 行進開始「慶祝五一——国際労働節」の大文字先登に二人の女の子。国旗をささげて旗手、女の子たち、みどりの旗に鳩、風うしろからふき、旗前にひらめく。
- ピオニール、みこしのやうに毛主席の像、ピオニール兵隊。



風船と子供

○スローガンの絶叫——これにこたへる群集、拍手。

（『中国旅日記』）

とある。北京市長の彭真氏の開会挨拶で式典が始まった。軍楽隊が国家「東方紅」を演奏する。「みんな脱帽し、しんとする。突然すさまじい大砲の音。（中略）先登隊が「慶祝五一国際労働節」の大文字をかかけ、整然とした列と歩調とで天安門前へ進んで来た」。⁽³⁸⁾「次から次に大行進が続けられ」、「毛主席万歳」⁽³⁹⁾と叫んでいた。「○ 白上衣と赤スカートの少女隊。白衣と花、リボン。○ 花輪をふる。「毛主席万歳」と絶叫。（中略）○ 数百羽の鳩、列中からとび立つ」（『中国旅日記』）。また、「大小数千の風船玉や、例のスローガンをかいたアドバルーンもあがる。肖像画が神輿のようにかつがれて来る」。⁽⁴⁰⁾

○ 天安門の毛主席立ちあがり、群衆に手をふる。こち側の端まで出て来る。烏打帽のやうな工人帽をとつて振る。光る額、豊かな風貌と、ガツシリした体格、

しきりに帽子を振り、自分で拍手する。大喊声。歩いて向ふへ行く。会釈にこたへる群衆。一言もいはいし、演説もない。すつきりしたものである。〔『中国旅日記』〕

行進が終わると、十二時四十五分であった。「検閲台上から、毛主席が手をふる、またひとしきりどよめきがあたりの空気をゆるがし、無数の風船が舞い上がった」⁽⁴¹⁾。一時に、紫禁城を出た。火野は、「ホテルにかえって昼食をすますと、ベッドにひっくりかえり、ひと眠りした」⁽⁴²⁾。四時ごろ、「メーデーに招かれた日本労働組合代表五十名ほどが、アジア会議の話をききたい」と⁽⁴³⁾いっている、一行全員で和平賓館に出かけた。

○4時 和平飯店(?)に一同で行く。日本からメーデーに招かれた労働代表50名あまりと会談、インド代表の挨拶(吉岡さん来ず、小林さん)自己紹介、畑中さんの状況報告。九州からも来てゐて、みんなと写真うつる。甄石工門さん、亀田さん、金子堅太さん、関鑑子さん等。関さんの歌で散会。

○6時半夕食。8時出発。ぞくぞくと天安門前の広場へなだれて行く市民大群。〔『中国旅日記』〕

会議後、夕食をとり、夜八時に再び紫禁城に行った。多くの市民も天安門前に集合していた。「○交通整理の巡查。黄色い帽子に白い袖(これは両手をひろげたとき、夜でも標識になる)黄色いズボン、黒いズック靴、赤いメガホン。武器は持つてゐない。○真黄色い軍服の人民解放軍兵隊。」「〔『中国旅日記』〕がいた。

「やがて、火花があがりはじめた。天空にパツとひらいて消える簡単な打ち揚げ火花。中央からは連続して、青白い火の粉を散らしながら、火の柱が立ちのぼる。やたらにポンポンバリバリと火花があがる」⁽⁴⁴⁾。



北京慶祝五一花火

○左手に光る「世界和平方歳！」の金文字。
○イルミネーション（中央法院、北京駅前門、国際ホテル、北京飯店等）

○花火の煙でモヤをかけたやうになる広場。

○花火のコナが天から降つて来る。眼にしみる。

○美しいイルミネーションの天安門と、八個の大提燈。紫禁城内も光でかがやき、自動車で埋められてゐる。いたるところにある「解放台湾」のスローガン。
10時帰る。街を埋めてる群衆。（『中国旅日記』）

仕掛花火などはなかった。清水女史（実名は、泉園子）が、「惜しいわねえ。せつかくのお祝いだから、仕掛花火があつたら、もっと楽しいでしょうに（中略）来年は仕掛花火を寄付しようかしら？」⁽⁴⁵⁾と述べる、と、

「（前略）この簡素な花火は社会主義的花火なんだから、贅沢な仕掛花火など、中国の人がよるこぶかどうかわかりませんね」

「でも、美しい方がよろしいでしょうに」
「ブルジョア的なものは反革命ですからな」⁽⁴⁶⁾

と同じ日本人のメンバーに言われた。火野はこのやりとりを見て、

有名な菓子屋の奥さんであり、日本矯風会会長でクリスチャンでもある清水女史が、仕掛花火を寄付したいと考えたのは、純粹の厚意からであったにちがいない。思想をはなれ、中国の人たちによるこんでもらおうという気持だったのであろう。それをブルジョア的といわれては、人間の心のつながりや、愛情の行方にも赤い垣がつくられる。清水さんの胸のうちなど、忖度してもわかることではないけれども、この矛盾について当惑している様子が見うけられた。⁽⁴⁷⁾

火野には、花火の「硝煙のにおいは戦場を思いおこさせた」⁽⁴⁸⁾。十時にホテルに戻った。そして、この賑やかな慶祝五一労働節の式典を見て次のように考えた。

まったくすばらしいメーデーであった。しかし、そのあまりのすばらしさに私は首をひねっている。これはなんの演出であろうか。天安門上に光りかがやいていた、毛沢東という偉大なる英雄の絶対的存在がつくりだしている幻想的雰囲気、その夢見心地はなんであろうか。ゆるぎない権力の座から、人民にむかってふられていた政府の要人たちの手は、なにかの不思議な魔法を知っているのではあるまいか。わざわざメーデーに各国から大勢の

人たちを招待し、その豪華無類のページェントを見せる中共政府の真意はどこにあるのか（後略）⁴⁹。

火野は、慶祝五一の式典を目の当たりにし、その素晴らしさに感動しながらも、毛沢東ら、共産党の権力者の様相に意図的な「演出」を感じ、華やかな式典にも、人民に対する何らかの強制的な権力がかけられているのではないかと、不信感を抱いている。

五、北京 五月二日

この日は、休養日で夕方まで自由行動だった。

○今日はお休み、自由行動といふことなので、天橋に行くことにする。一行、鈴木、近藤、坂本、松本、富永それに秋元さんが同行。三輪（60銭）にゆられて十二時ごろ出発。どこか外で昼食をしようといふわけ。

（『中国旅日記』）

火野は、三回目の天橋に、一行を案内することにした。火野は、新中国滞在中、ずっと「特定の誰かが見ているという狭い目ではなく、漠然とだが、つねにあらゆる人たちの眼がそがれているという、圧迫感、或る息苦しさからはやはり抜けきれなかった⁵⁰」という。さらに、次のように続ける。

それは形のない、空気のように遍満したもの、赤い国全体の思想の眼、革命の眼というような茫漠としたものだ



天橋

が、それだけに不気味であり窮屈でもあった。なんともいえぬいやな感じでもある。⁽³¹⁾

三輪車に乗って天橋に向かった。天橋は、「狭い道、ゴタゴタした店、あまり裕福ではなさそうな中国人の群衆、さまざまの香がまじった異様な食物の風、雑然とした音響の交錯——なつかしい昔のままの天橋だった」⁽³²⁾。天橋の様子を次のように記している。

- 二友軒。票価。五份。孫創池表演科学魔術 美人首の蛇の伝「美帝大長蛇」「真人芸術表浴」
- 「客満」入れ替を待つ。驚巧魔術文武雅技新奇幻伝「不足三市尺的兒童謝絶入場」
- 少女、床几、不□、茶わんと玉、汗□□
- 手品、紙と布、トランプを小さくする。

(『中国旅日記』)

「しかし、やはりそこにも顕著な変化がおこっているこ



天橋

とが、ぐるぐると歩いているうちに、すこしずつわかって来た⁵³」とし、

ちやちな白幕に魔奇術の広告絵をかき、楽隊で客を呼んでいる。「二友軒、票価五分。孫創池表演科学魔術」
「驚巧魔術文武雅技新奇幻術」などと書いた幕に、ト
グロをまいた蛇の頭が西洋人になっている絵があり、
「美帝大長蛇」と説明してある。美帝はアメリカ帝国
主義だ。昔はこんなものはなかった。⁵⁴

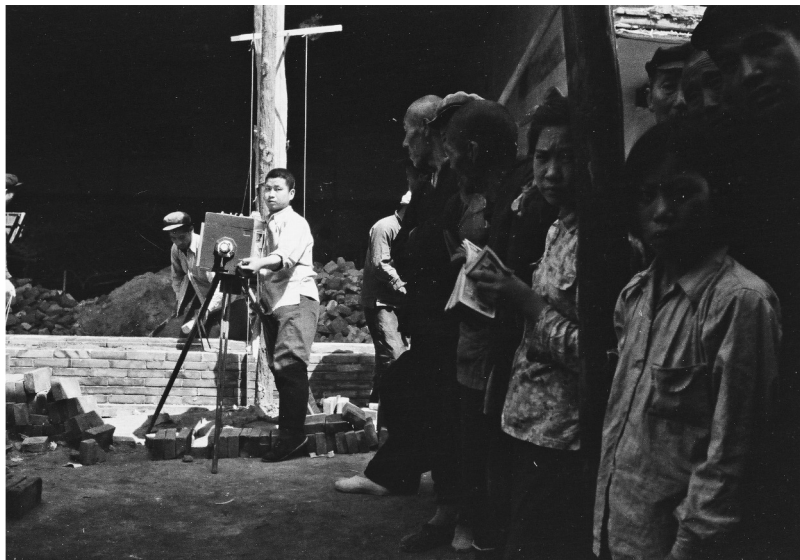
私たちは小屋のなかにみちびかれた。(中略)一人の
品師があらわれ、赤い玉を布の袋から出したり入れた
り、トランプをだんだん小さくしたり、たわいもない
奇術を得意気にやる。十歳くらいの少女が出て来てア
クロバット。身体に骨がないと思われるほど全身グ
ニヤグニヤで、気味がわるい。次に、さつと幕があく
と、花鉢のうえに少女の顔だけが乗っかかっていた。⁵⁵



天橋の少女のアクロバット



花鉢の上の少女の顔



街頭写真屋

また、今や「あれほどのバクチ好きの中国人がバクチをやらなくなったらしい」⁵⁶のである。「道端にしゃがみこんで、大勢がなにかやっているので、バクチかと思った」が、「バクチではなくて篆刻屋だった」⁵⁷。また、「早取の街頭写真屋がいた。三脚のうえに長方形の箱をのせ、それがカメラにもなり、現像焼付室にもなるという簡便なものだ。記念写真をとろうということになる」⁵⁸。そして、昔はあんなにいた「蠅の姿がほとんど見えない」⁵⁹。火野は、「昔のすさまじい蠅の大群を知らぬ者は案外そんなに思わないかも知れぬが、私などには瞠目に値するものと考えられる」⁶⁰と続ける。若い工作員の陳少雲は、「毛主席指導のもとに、衛生愛国運動が展開され（中略）中国の不名誉な名物であった蠅や蚊や伝染病がなくなったのです」⁶¹と答えた。そして、「政府の命令でやったのですか」という質問に、「国民が自覚し、自発的にやるよう、政府はただそのきっかけを作っただけでした」⁶²と述べた。火野は、街並みが美しくなったことに驚き、この陳の発言に対して以下のように思う。

私は「国民の自覚による自発的行為」という言葉にちょっとひっかかるものを感じた。(中略) 国民の自覚と自発的行為が、実際は他覚であり他発的行為なのではないか。私は人間というものは一種の滑稽動物で、頑固なまでに暗愚な稟質であり、自覚や自発的行為などというものはなかなかやらないものだという風に考えていた。(中略) それなのに、六億もの中国人が、五千年間もやらなかった自覚を、わずか解放後の五年間でやったとすれば、それこそ革命の名に値する。しかし、それが政治革命であるか、人間革命であるか(中略) 私には政治革命よりも人間革命の方が十倍も百倍もむずかしいと考えられるからである。⁽⁶⁵⁾



篆刻の人々

このように、共産党の改革を、人間を無理やり急激に変化させる人間革命ととらえた。火野は良い改革ととらえはしないのであった。昔は「乞食もウヨウヨしていたが、今は見えない(中略) 昼間から客をひいていたパンパンの姿もない」⁽⁶⁴⁾。火野は、生涯を芸一本に打ち込んでいる、天橋の手品師の姿を見ながら、やっと「人間に接したような気がする」⁽⁶⁵⁾ので



天橋のお茶店

あった。徳興隆茶社でお茶を飲み、天橋を去って、天安門広場を通り、王府井に出て東安市場の前でおりた。そこで、大衆食堂に入った。そこで、天橋の街頭写真を包んでいる新聞の記事が目に残った。ちぎれているので定かではないが、『人民日報』か、『北京日報』かに、「公安局通告」の欄があるのを見つけた。そこには、「反革命分子の告白自首の便宜のために、規定された条目がかいてある」。火野は「密告というものは陰惨なものであるが、新政府は革命目的のために、大いにこれを奨励しているようだった」と述べる。これらを見て火野はつぎのように考えた。

つねになにかを警戒し、つねに相手を疑っているような日常坐臥というものが、人間の幸福や自由の裏づけとなることも出来るだろうか。⁶⁷

現在の日本では大臣を罵倒しようが、天皇陛下の悪口をいおうが罪に問われることはない。戦時中はそうではなかった。全体主義ファシズム体制は自由を許さな

いからである。現在の中国がどうもそうらしい。毛沢東を批判したり悪口をいったりすることは反革命の第一で、ただちに投獄されるのである。赤色全体ファッショ体制が確立しているようである。⁽⁸⁸⁾

火野は、新中国の自由のない体制を、戦前の日本の軍国主義と重ね、そこに「全体主義ファッショ体制」を見るのである。さらにつきぎのように続ける。

偉大なる毛沢東の英雄像がその頂点にそびえたち、御神体のように光りかがやいている。私は密告のもたらず人間の不安を考えると、表面の現象を支えている力に疑義がわく。(中略)天国と地獄との別れ目は自由の有無にかかわっているのではなからうか。⁽⁸⁹⁾

このように、自由があるか否かが、人間にとっていかに重要であるかを強調するのである。そして、新中国は自由がないと断ずる。さらに、火野は、密告の奨励などの現在の新中国の様子を見て次のように述べる。

こういう陰惨さや権力の圧力がなければ、わずか五年ほどの間に、新中国がこんなにも変えることはできなかったにちがいない。それは一種暴力的な印象さえあたえる。⁽⁹⁰⁾

このように記し、新中国の強権的弾圧の様相を批判する。夜は、首都劇場で「映画「無窮的潜力」(首都劇場)東北電影廠」(『中国旅日記』)を鑑賞した。火野によると「重工業地帯である旧満州の或る製鉄工場を舞台に、新しい

機械の發明に没頭する一工員の苦心譚⁷¹』という内容であった。

六、北京 五月三日

五月三日は、火野が『人民日報』での胡風批判を読んだコメントが記される。火野は、「批判というよりは罵倒に近い⁷²」と述べる。ここで、胡風について振り返ろう。胡風とは、中国の文藝理論家、評論家、翻訳家詩人でもある。慶応大学での留学経験もある。胡風は、一九五四年七月に、「文芸問題に対する意見」を書き、中央共産党に提出する。これは、共産党指導者への文学への無理解と派閥的運営を批判したものであるが、『文藝報』一九五五年一、二合併号の付録として全国の読者の討論に付された⁷³。このことに対して、批判した記事を読んだのである。胡風は、毛沢東から反革命分子とされ、一九五五年五月十六日に逮捕された。その直前の新聞記事をこの日、火野はとりあげている。この日の新聞だけでなく、それ以前の新聞でも胡風のこととは、「剥去反党陰謀家故風の仮面目」「故風反動思想的伝道士」「暗藏的狼」「兇惡的敵人⁷⁴」などとあった。火野は、次のように言う。

どちらが正しいのかわからないが、胡風の批判のされかたはほとんど暴力的で、袋だたきという感じだ。これはすでに政治問題にちがいないと思われた。胡風を反革命分子として葬り去ることが、政府にとって必要なのであろうと思われる⁷⁵。

この日は、文学者座談会を開くために、十時に中国作家協会の事務所に行った。参加者は十四名。火野は司会を引き受けた。

十四名の参加者からの要望や聞きたいことが簡条書きで以下のように記されている。

文学者座談会への要項

- 一、古典文学、民話、伝説等、民族文化の伝統が新中国の文学においてどのやうにとりあつかはれ、うけ入れられてゐるか。(たとへば、「紅樓夢」問題、水滸伝、西遊記、聊齋志異、金瓶梅等)
- 一、解放前の文学と解放後の文学との関係。その文壇的意味。(解放前の作家たちはどうしてゐるか)
- 一、作品の発表形式。文芸雑誌と出版について。(新聞雑誌、単行本、かきおろし、同人雑誌等)
- 一、批評活動のありかたとその方式。(批判がどんな形式で行はれるか。何かの委員会にかけ、出版禁止などするか。発表前の審査、検閲などあるか)
- 一、文学者の生活と政府との関係。(文学者は筆一本で生活してゐるか。政府は援助してゐるか)
- 一、新中国文学に於ける高級と通俗との問題。(日本のやうに純文学、大衆文学の差があるか。本屋に行くと、通俗読物と初級文学的なのがあるが、ひろめること高めることの問題)
- 一、広汎な大衆の中からよき作品と作家とを発見するどのやうな方法が講じられてゐるか。
(たとへば、「高玉宝」「崔八娃」などのやうなもの。援助したといふ劉白羽氏(荒年)はどうしてこの二人を発見したか) 劉白羽「五台山下」―「光は前方にあり」―「環行素北」
- 一、最近もつとも活躍してゐる作家と、もつともよく読まれてゐる作品。その理由。
- 一、職場文学について。
- 一、文学賞について。(あるかどうか。あればどのやうな形式で授与されてゐるか)

一、解放前の詩と現代詩との関係。

一、児童文学の現状。

一、中国古典劇と近代劇との関係。(別個のものとして並立してゐるか。新劇の中にとり入れられてゐるか。)

一、日本の歌舞伎についての意見。(猿之助一座のこと)

一、日本の文学についての意見。(徳永、岩上、両氏のこと)

一、中国と日本との文学的交流についての意見。(翻訳権の問題)等。

一、文学教育の問題

一、農民文学——吉岡氏

(『中国旅日記』)

これらの質問に、『三千里江山』の作者楊朔さんが丁寧に答えてくれて、座談会を進めていた。楊朔さんは、「中国における新文学の道は「五四運動」からはじまったといえる。その後は一貫して、ただ一つの方向をとっている。一九四二年、毛沢東が延安でおこなった「文芸講和」の線「労働者、農民、兵士に服務する文芸であつて、その創作方法は社会主義リアリズム」⁷⁷⁾。したがつて、思想的には解放前、解放後という区別はない。」と説明した。さらに、

国家は作家の創作を援護する。工場をかこうと考える作家には工場に入る便宜をあたえ、留守中の家族の生活をみてやる。作品ができあがるまで作家の生活を保証する。(中略)以前は「文学乞食」といわれたくらい作家は貧乏で、本を出しても三千部以下であつたが、現在は五万部十萬部と部数が出る。作家の生活は向上した。⁷⁸⁾

また、「もし作家が作品がない場合でも、次の作品ができるまで中国作家協会は手当を」⁷⁶⁾ あたえるといふ。火野は、この話を聞いて「それはうらやましい話ですね」と述べた。そしてここでも胡風のことが話題となった。説明によると、

胡風の哲学は主観的唯心論で、客観的唯物論とは反対側にある。マルクス・レーニン主義を表にはかかっているが、実際は反党的陰謀家で、国民政府と通じていた形跡もある。いま彼の思想検査をやっているが、裏切的言動が顕著になるばかりだから、反革命分子として摘発されるかも知れない。そんな風に説明されても、ただなるほどと聞くばかりで、賛成も反駁もする材料を持たなかった。⁷⁷⁾

ということだった。胡風は、逮捕されてから一九六〇年代まで収監され、その後無期懲役を受けた。一九七九年に出獄し、名誉回復が行われ、一九八二年には、中国文学芸術界連合会委員となり、さらには、中国作家協会と文化部文学芸術研究員顧問となり、一九八五年六月八日に死去した。⁷⁸⁾ 後には、当時の逮捕、投獄が間違っていたと名誉回復された胡風であったが、一九五五年は、共産党に逆らえば、それがたとえ文芸問題であっても、粛清と罵倒、逮捕、監禁される状況であった。また、火野は、この一九五五年五月三日「毛沢東刈りという頭の恰好も流行しているのとこだ。ヒトラー髭というのが昔はやったことがあるが、こういう流行には首をひねらずには居られない。」⁷⁹⁾と述べ、毛沢東とヒトラーを結び付けて、一人の英雄、指導者を無批判に、神の如く崇めるさまに、戦時中の国民と同じような傾向を見出して、疑念を抱いている。そして、火野は、最後には、

私はどんなに中国がすばらしい建設をし、国家として発展しても、この国に住みたいと思う気持はどうしても湧いて来なかった。作家の生活はたしかに羨むに足りるが、保護されているのは国策の線に添う御用作家ばかりであって、自由奔放な作品をかきたい作家は受け入れられないのである。そののみか反革命といって批判されたり粛清されたりする。私はこの圧力には到底耐えられない。⁸³

と結論付けた。さらに火野は、次のように続ける。

国家から見放されても、メ切に追われ、カンヅメにされても、日本の方で文学をやりたい。勝手なものが書いた。戦争中、軍と大政翼賛会との統制下にペンを鎖でしばられた体験は、思い出しても身ぶるいのする地獄であった。赤い国に来て赤い文学を書いて居れば楽かも知れないが、私は楽でない方をやはり選びたいと思った。⁸⁴

以上のように、火野は、新中国に良い印象を持たないのであった。こうして、中国作家協会を午後一時に退出した。その後、昼食を食べ、二時頃、中国民族学院を見学した。

まだ門や校舎が完全に建って居らず、校庭も土がこねくりかえされたうえに、石、瓦、セメントなどが方々に積んである。オシメをした馬の引く馬車がしきりに出入している。私たちの自動車やバスが着くのを早くから待っていたらしく、宗文さん（副校務長）、霍さん（事務室主任）、登さん（副主任）などが古雅な建物の客庁前に出迎えていた。ひろい応接室に通される。特に私たちの案内役に、モンゴールの蘇論呵さんと、海南島黎族の王

文明君とがつけられた。どちらも若く、澁刺とした剽悍の風貌をしている。日本語はできないので、ときどき微笑をふくんで、茶を運んだり、書類を示したりした。⁸⁵⁾

この学校は、

一九五一年、当学院は中央人民政府政務院の民族学院の準備案にもとづき成立した。学生は一三〇〇名。語文一科、政治関係、予備科の三部門がある。学資はすべて国家負担、小使いまでやっている。⁸⁶⁾

ということであった。火野らは応接室を出て、学校見学をし、講堂に行き、図書室に行った。ここでは大勢の学生が読書をしていた。その後、研究部の資料室などに行き、六時にこの学校の見学を終えた。その後、長安大戲院にて、京劇「鉄面無私清官譜」を見る。火野は、「豪華絢爛たる絵巻物である。テーマは国策の線に添うよう多少は変改されているらしいが、なんといっても長く伝わって来た技術のすばらしさがあって、時間の経つのを忘れた⁸⁷⁾」という。さて、火野は次のように、新中国のことを述べる。

現在における新中国での一切のことは遠い国の出来事ではなく、すべてアジア全体に関連し、そのまま、まっすぐに日本につながっているということを疑うことができないのである。中国社会の変化、建設の状況などに対し、遠い他国の出来事として、もし日本が目をもそむけていたならば、あまり遠くない将来にかならず大きな悔いをものこすであろう。⁸⁸⁾



モンゴル人の通訳と葦平



図書室

北京市京劇二團演出

一、反對美帝——共防俄條約。二、反對美帝——共防俄條約。三、反對美帝——共防俄條約。四、反對美帝——共防俄條約。

長安戲院

1955

五月四日

一九五五年 火野葦平の北京視察

鐵面無私清官譜 劇情說明. 楊春春, 朱嬌, 裴盛戎, 陳永玲, 王元信, 李多奎, 翟韻全, 楊榮環, 白慶祥, 馬長禮, 陸洪瑞, 祁榮嬰, 劉慶義, 李德奎, 張世年, 張洪祥, 哈金增, 李慶才, 慈少泉, 高寶賢, 王慶賢, 李盛芳.

鐵面無私清官譜 (『中国旅日記』)

新中国の動向を、今後も注視すべきと訴えるのである。そして、「日本人はかたよらぬ目と心とで、新中国の動きを見守るべきときと思う。そして同じ東洋人として、東洋の友好と平和を守るために、手をにぎりあわねばならない」と結論づけた。

終わりに

本稿では、火野葦平の一九五五年「アジア諸国会議」後に訪れた新中国、特に数日間の北京視察について報告した。火野は、新中国が、美しくなり、売春や博打などがなくなること、建設ラッシュで都市整備が行われていることに驚きと感動を示す。また、作家などが、多くの支援を受けて活動できるなど、新中国共産党体制への一定の評価をしている。一方で、共産党の独裁体制のなかで、国民が強制され、自由がないことを嘆いている。しかも、共産党の主義に反する者の密告を奨励し、その人を犯罪者として、肅清、投獄しているという事実が、一九五五年五月の北京にはあった。火野は、そのことに対しては危惧をし、自由がなく、戦時下の軍国主

義体制と同じであると警告している。特にこの時は胡風問題の真ただ中で、火野は、胡風批判問題に対しても、憂慮している。一九五五年に、新中国の矛盾と良さを冷静に観察し、その後を迎える文化大革命へと至る中国の負の歴史の予兆を感じ取り、それを同時代に発信する。そこに火野の北京視察の意義を見出すことができるだろう。

注

- (1) 關西大学『文学論集』(2015年9月)
- (2) 關西大学『東西学術研究所』(2016年4月)
- (3) 關西大学『文学論集』(2020年3月)
- (4) 『東アジア文化交渉研究』(2011年2月)
- (5) 火野葦平『赤い国の旅人』(1955年12月、朝日新聞社)
- (6) 昭和27年に起こった赤平事件にて、指名手配され、中国に逃亡する。
- (7) 『赤い国の旅人』187～8頁
- (8) 『赤い国の旅人』189頁
- (9) 『赤い国の旅人』189頁
- (10) 『赤い国の旅人』189～90頁
- (11) 『赤い国の旅人』190頁
- (12) 『赤い国の旅人』193頁
- (13) 『赤い国の旅人』192頁
- (14) 菊池俊介「日本占領下華北における在留邦人の対中国認識」大阪大学法学部 [www.law/osakau.ac.jp](http://www.law.osakau.ac.jp)
- (15) 『赤い国の旅人』196頁
- (16) 『赤い国の旅人』196頁
- (17) 『赤い国の旅人』197～8頁

- (18) 『赤い国の旅人』 198頁
- (19) 『赤い国の旅人』 198～9頁
- (20) 『赤い国の旅人』 199頁
- (21) 『赤い国の旅人』 199～200頁
- (22) 『赤い国の旅人』 205～6頁
- (23) 『赤い国の旅人』 207頁
- (24) 『赤い国の旅人』 210頁
- (25) 火野葦平「旅のあとをふりかえって」〔西日本新聞〕昭和30年7月11日
- (26) 『赤い国の旅人』 209～10頁
- (27) 『赤い国の旅人』 214頁
- (28) 『赤い国の旅人』 216頁
- (29) 『赤い国の旅人』 218頁
- (30) 『赤い国の旅人』 219頁
- (31) 『赤い国の旅人』 219頁
- (32) 『赤い国の旅人』 224頁
- (33) 『赤い国の旅人』 224頁
- (34) 『赤い国の旅人』 229頁
- (35) 『赤い国の旅人』 231頁
- (36) 『赤い国の旅人』 231頁
- (37) 『赤い国の旅人』 231頁
- (38) 『赤い国の旅人』 231～2頁
- (39) 『赤い国の旅人』 232頁
- (40) 『赤い国の旅人』 232頁

- (41) 『赤い国の旅人』 235～6頁
(42) 『赤い国の旅人』 237頁
(43) 『赤い国の旅人』 237頁
(44) 『赤い国の旅人』 239頁
(45) 『赤い国の旅人』 239頁
(46) 『赤い国の旅人』 240頁
(47) 『赤い国の旅人』 240頁
(48) 『赤い国の旅人』 240頁
(49) 『赤い国の旅人』 241頁
(50) 『赤い国の旅人』 242頁
(51) 『赤い国の旅人』 242頁
(52) 『赤い国の旅人』 244頁
(53) 『赤い国の旅人』 244頁
(54) 『赤い国の旅人』 244頁
(55) 『赤い国の旅人』 244～5頁
(56) 『赤い国の旅人』 245頁
(57) 『赤い国の旅人』 245頁
(58) 『赤い国の旅人』 245～6頁
(59) 『赤い国の旅人』 246頁
(60) 『赤い国の旅人』 247頁
(61) 『赤い国の旅人』 247頁
(62) 『赤い国の旅人』 248頁
(63) 『赤い国の旅人』 248頁

- 〔64〕『赤い国の旅人』 251頁
- 〔65〕『赤い国の旅人』 252頁
- 〔66〕『赤い国の旅人』 256頁
- 〔67〕『赤い国の旅人』 256頁
- 〔68〕『赤い国の旅人』 256～7頁
- 〔69〕『赤い国の旅人』 257頁
- 〔70〕『赤い国の旅人』 257頁
- 〔71〕『赤い国の旅人』 259頁
- 〔72〕『赤い国の旅人』 262頁
- 〔73〕杉森正彌「中国近代文学のなかの旧文学（下）——胡風批判——」（『北海道学芸大学紀要』1955年12月）
- 〔74〕『赤い国の旅人』 262頁
- 〔75〕『赤い国の旅人』 262頁
- 〔76〕一九二三年四月二十八日～一九六八年八月三日 中国山東省生まれの作家。
- 〔77〕『赤い国の旅人』 264～5頁
- 〔78〕『赤い国の旅人』 265頁
- 〔79〕『赤い国の旅人』 265～6頁
- 〔80〕『赤い国の旅人』 266～7頁
- 〔81〕李輝著『囚われた文学者たち』（1996年、岩波書店）巻末年表参照
- 〔82〕『赤い国の旅人』 262～3頁
- 〔83〕『赤い国の旅人』 267頁
- 〔84〕『赤い国の旅人』 267頁
- 〔85〕『赤い国の旅人』 270頁
- 〔86〕『赤い国の旅人』 271頁

關西大學『文學論集』第七十一卷第三号

(87) 『赤い国の旅人』 275頁

(88) 火野葦平「旅のあとをふりかえって①―見なおそう新生中国―」〔西日本新聞〕昭和30年7月5日

(89) 同右